

国際協力特論

長田こずえ

● 講義概要

本研究では国際協力の基礎と実践に関する幅広い理解を目的とする。大学院生の諸君は、学部在学中に一般教養として、国際関係や国際協力に関する基礎的な事項を勉強してきたと思われるが、大学院においては、分野の専門的な勉強の ABC として、「国際協力とは何か」という、さらに深い知識と実践を身につける必要がある。学部時代に基礎的な知識を身につけた人は、本格的な国際協力の専門家の卵として、さらに、専門的な知識と教養が必要である。授業終了までに、国際協力、国際援助支援についての論点を、問題点を含めて、十分に理解できるようになる必要がある。

実際、国際協力を正確に捉えるのはかなり難しい。この国際協力の授業においては、国際協力の中でも一番規模の大きな、国際開発協力を中心に、平和維持、文化と国際協力、開発と人権に関する問題、環境問題などを幅広く学び、国際協力に対する専門的な知識と心構えを身につけることを目的とする。特に、国際開発協力の中でもコアとされる、政府開発援助(ODA)に関する知識の習得は重視する。

「グローバル時代に生きる地球市民の一員として、我々が、どのように国際協力に貢献することが出来るか」を考察し、また、地球規模の課題を解決するためのアクターについても焦点を当てたい。アクターとしては、国家(中央政府)や、JICA や USAID などの ODA 機関、外交だけではなく、国連開発計画(UNDP)やユニセフなどの国連ファミリー、NGO などの市民社会、プライベートセクター(いわゆる私企業)、地方自治体やコミュニティーなどが参加している、いろいろな形態の国際協力についても、21世紀を担う中心的な国際協力の参加者として、取り扱うことにする。

ODA に関する知識の習得と同時に、国際関係、国際協力を理解するためのキーワード(日本語・英語)を習得することも目的とする。この世界では、頻繁に専門的なキーワードが使われている。将来、国際協力のプロとして、世界の現状と変動を理解した上で、知的な論議にバランスよく参加できるだけの実力を身につけてもらいたい。そのためには、基礎的・専門的な英語の理解は授業を通して重視される。英検2級程度の力量は期待される。

また、教養としてこの授業を選択することも可能である。我々も、一般市民の文化交流や、企業の社会的責任などを理解することにより、身近な生活の中でも国際協力が出来ることを認識し、身近なものとして国際協力を考えてみたい。将来、学生諸君が、それぞれの国際協力や国際関係における専門分野の研究課題を選択する前の、一般的な大学院レベルの知識を得るための必須教養の授業として、国際協力の論点と視点を提供するためのコースであると理解してもらってもよい。国際協力の専門家志向の人、そうでない人、どちらでも OK のコースである。

● 学修到達目標

- 国際協力の専門的な事項を理解し、国際協力に関する自分なりの意見を言えるようになる
- ODA に関する理解を深め、日本の ODA の実態を把握する
- 国際協力分野のキーワードをマスターする

- グローバリゼーションにおける、政府援助団体、国際連合、市民社会、企業などの国際協力の担い手に関する専門的な知識を身につける
- 国際文化協力と知的協力の活動を理解する
- 持続的な国際開発協力の意義と Sustainable Development Goals SDG を理解する
- 安全保障と平和構築に関する国連の役割と国際協力に関する基礎的な知識を身につける
- 国際協力分野における自分の課題を見つけ出す
- コミュニケーション手段としての英語力(最低英検2級程度)を身につける

● 講義計画

- 第1週 オリエンテーション、国際協力とは（国際開発論 序章）
- 第2週 国際協力: (i) 国際開発、人権、平和と安全、文化に関する21世紀の協力についての基礎（教科書 国際協力のレッスン 序章とグローバルガバナンス）グローバルガバナンス & (ii) 国際連合と国際協力（教科書 国際協力のレッスン レッスン1&2）
- 第3週 国際開発の国際協力 ― 人間開発と社会開発（教科書 レッスン5）（教科書 国際開発論 5、6章） 国際開発の国際協力:人権に基づく開発 人権、ジェンダー、子供 ―（教科書 国際協力のレッスン レッスン6、7、8）
- 第4週 政府開発援助 ODA 基礎（教科書 国際開発論 11 章）
- 第5週 開発実践(開発ワーカーの実践の体験に触れる 1 - 実践家の体験談 ODAとJICAの活動について
- 第6週 国際協力:文化協力とユネスコの意義（教科書 国際協力のレッスン 10）(国際開発論 10 章 4 節)
- 第7週 国際開発の国際協力 ― 持続可能な開発 国連の Sustainable Development Goals (SDG)に関する レッスン（教科書 国際協力のレッスン レッスン2&12 プラス 国連 SDG 資料）(教科書 国際開発論 8章)
- 第8週 市民社会と国際協力―NGO の活動（教科書レッスン9）フェアートレードと企業の社会的責任（教科書 国際協力のレッスン レッスン11&13）
- 第9週 開発実践(開発ワーカーの実践の体験に触れる 2 - 実践家の体験談 私企業の国際協力について
- 第10週 政府開発援助 ODA 発展（教科書 国際開発論 11 章 ）
- 第11週 国際関係 キーワード 基礎
- 第12週 平和構築 平和と安全に関する協力 ―平和分野における国連の役割（教科書レッスン 2&4)平和構築 平和と安全に関する協力 -難民に関する問題（教科書 国際協力のレッスン レッスン3）
- 第13週 平和構築 ―実践に触れる 3 難民申請者の声を聞く
- 第14週 国際関係 キーワード 発展
- 第15週 授業の要点 REVIEW と自分の課題発見

第16週 定期試験期間

● 事前事後学習

生活習慣を整えて、毎回、積極的かつ元気にこの授業に臨めるよう準備してください。常にTVや新聞などの国際ニュースを見ておき、国際的な出来事に注意を払うように。出席率や重視、授業中の私語や雑音は避けてください。課題に関する予習復習をお願いします。期末試験がありますが、特に、ペーパー提出の義務はありません。

● テキスト

牧田東一『国際協力のレッスン 地球市民の国際協力入門』、学陽書房、2013年

斉藤文彦『国際開発論 ミレニアム開発目標による貧困削減』、日本評論社、2014年

その他、授業に必要な教材は、全部 CCS の教材ボックスに掲載されます。この授業は基本的にはペーパーレスです。予習復習は、CCS に掲載されたパワーポイントや資料を参考にしてください。教科書は3冊ありますが、全部必ず購入してください。必須です。教科書は皆さんの一生涯の財産です。

● 参考資料

初瀬龍平他『国際関係 キーワード 明日の福祉社会のために International Studies』、有比閣双書、1997年

国際協力は英語は必須です。授業と平行して、英検準1級か最低2級くらいの知識は身につけてください。英検、TOEIC などを受けて、自分の英語の実力を測ってください。

● 成績評価方法

授業内での取り組み状況、学期中の参加および学期末の試験の結果を総合的に判断して評価を行います。

出席率3割、授業への貢献3割、期末試験、又は期末レポート4割

● その他留意事項

毎回の授業に関する詳細な内容は、事前にアナウンスされるので、よく確認してください。

このコースでは、学習に加えて現実の社会での活動や、日本の内外で展開されている国際理解・国際交流活動などへの強い関心が求められます。3回ほど、国際協力の実践家の話を聞く機会も与えられます。積極的に授業内外の活動に参加してください。授業外フィールド訪問などにも積極的に参加してください。

国際関係特論

増田 あゆみ

● 講義概要

本研究は、国際関係を、国際関係論のパラダイム(範例)に沿って、見ていくことによって、20世紀初頭の国際関係から現在の国際関係がどのように変化してきたのかを分析していこうとするものである。

20世紀初頭の国際関係論パラダイムは、列強国を行動主体(アクター)として承認した軍事力と帝国主義を重視した西欧国際体系であった。第二次世界大戦後は、米ソを中心とする東西冷戦の思考軸がパラダイムになり、1960年代からは、南北問題と国際的相互依存が、国際関係論のパラダイムに加わった。さらに地球環境問題も加わり、国際関係は、国際間関係、トランスナショナルな関係、超国家的機能による3層部から構成されるものとなった。伝統的な国家間関係にくわえ、ヒューマン・イシューとグローバル・イシューが、国際関係のパラダイムの一部を構成するようになってきたのである。

本講義においては、従来の伝統的国際関係のパラダイムの確認も行いながら、この新しいパラダイムのヒューマン・イシュー(人権論、ジェンダー、子ども、健康、エスニシティ)とグローバル・イシュー(国際連合、グローバル・ガバナンス、地域統合、多文化主義、情報ネットワーク、地球環境問題)を中心に、現在の国際関係を見ていきたい。なお、各イシューにおいては、一般的解説、および具体的な事象による事例研究を含み、問題提起を行いながらの分析を進めていきたい。

● 学修到達目標

国際関係論および国際政治学の基礎を固めることが目標となる。

国際関係論および政治での物事の構造、国家間、社会間の関係を、基本的な理論に基づいてみることができるようになることを本講義の到達目標とする。

● 講義計画

- 第1週 国際関係のパラダイム(範例)とは
- 第2週 国家間関係、国家安全保障
- 第3週 外交、戦争
- 第4週 植民地支配
- 第5週 人権
- 第6週 ジェンダー、子ども
- 第7週 人間の安全保障
- 第8週 エスニシティ
- 第9週 国際組織
- 第10週 グローバリゼーション
- 第11週 地域統合
- 第12週 多文化主義
- 第13週 情報ネットワーク
- 第14週 地球環境
- 第15週 新しい国際関係の分析に向けて

● 事前事後学習

事前学習においては、テキストを読んで、疑問・質問事項をまとめておくこと。

事後学習においては、疑問・質問事項の回答をまとめて、レポート課題にして提出すること。

● テキスト

初瀬龍平、定形衛、月村太郎編『国際関係論のパラダイム』(有信堂)

● 参考資料

テキストの中に明記。

● 成績評価方法

課題レポート報告:50%、出席:50%

● その他留意事項

講義中の議論に備えて、事前学習を十分に行うこと。

NGO・NPO特論

田浦 健朗

● 講義概要

地球規模の環境問題である気候変動・地球温暖化が極めて深刻になり、「気候危機」という認識も広がっている。この危機に対して世界中のユース世代が解決に向けた声を上げている。この講義では、気候危機問題に焦点をあて、解決に向けた重要なセクター・組織であるNGO・NPOについて学び、克服のための方策について考えることを目的とする。世界全体では、人口増加、貧困と格差問題、環境問題などが深刻な課題であり、持続可能な社会への転換が模索されている。気候変動問題に関しては、「パリ協定」が2016年11月に発効し、脱炭素と再生可能エネルギー100%に向けて大きく転換しはじめている。国内では、人口減少・高齢化が進みつつある状況で、新しい社会制度・産業構造、生活様式への転換が必要であり、様々な課題が顕在化している。特に「2050年カーボンニュートラル宣言」が2020年10月だされたが、その実現に向けた課題も多い。これらの課題解決に向けて、国際社会、国レベル、地域レベルの地球温暖化防止のための政策や制度、そして地球温暖化防止に取り組んでいるNGO・NPOの現状を把握し、その使命や役割、課題について学び、議論する。講義は隔週になるので、各回のテーマに関する基礎知識を共有し、報告・ディスカッションを行う。

● 学修到達目標

NGO・NPOの視点・ビジョン・使命を理解し、現実社会の課題を発見・分析し、課題解決のための基礎的な能力を獲得すること。日本国内の公共政策・社会制度とNGO・NPOに関する理解の深化と、国際的な比較による社会的課題を整理する能力を獲得すること。

● 講義計画

第1週 オリエンテーション、NGO・NPOとは

第2週 NGO・NPOの組織・活動の現状、気候変動・地球温暖化問題について

第3週 気候変動に関する国際交渉におけるNGO・NPO

第4週 エネルギー問題、再生可能エネルギーとNGO・NPO

第5週 国内外の地球温暖化対策とNGO・NPO

第6週 持続可能な地域づくりとNGO・NPO

第7週 NGO・NPOの活動事例、パートナーシップとネットワーク

第8週 NGO・NPOの役割・課題と今後に向けて、まとめとレポート提出

● 事前事後学習

事前には参考文献を参照し、事後にはレビューと次週までの課題について調査する。

● テキスト

平尾剛之・内田香奈編著『京都発NPO最善戦』京都新聞出版センター、2018

● 参考資料

国立環境研究所『都市の脱炭素化』、大河出版、2021

ノーム・チョムスキー他『気候危機とグローバル・グリーンニューディール』、那須里山舎、2021

国際環境NGO FoE Japan『気候変動から世界をまもる30の方法』、合同出版、2021

ポール・ホーケン編著『ドローダウン地球温暖化を逆転させる100の方法』、山と溪谷社、2021

斎藤幸平『人新世の「資本論」』、集英社新書、2020

諸富徹『グローバル・タックス』、岩波新書、2020

夫馬賢治『データでわかる2030年地球のすがた』、日経BP、2020

堅達京子『脱プラスチックへの挑戦』、山と溪谷社、2020

マレーナ&ベアタ・エルンマン／グレッタ&スヴァンテ・トゥーンベリ『たったひとりのストライキ』、海と月社、2019

宇佐美誠編『気候正義』、勁草書房、2019

気候ネットワーク編『石炭火力発電Q&A 脱石炭は世界の流れ』、かもがわ出版、2018

諸富徹『人口減少時代の都市』、中公新書、2018

ムハメド・ユヌス『3つのゼロの世界』、早川書房、2018

蟹江憲史監修『未来を変える目標 SDGsアイデアブック』、紀伊国屋書店、2018

中島大『小水力発電が地域を救う』、東洋経済新聞社、2018

イヴォン・シュイナード『社員をサーフィンに行かせよう』、ダイヤモンド社、2017

澤村明他『はじめてのNPO論』、有斐閣、2017

坂本治也編『市民社会論』、法律文化社、2017

和田武『再生可能エネルギー100%の時代の到来』、あけび書房、2016

他

● 成績評価方法

出席と議論への参加・報告(60%)。課題レポート(40%)。

● その他留意事項

講義計画は、変更する場合がある。

現代欧米文化社会特論

鈴木 啓司

● 講義概要

本研究では、新聞(Le Monde 他)、雑誌(Le Point 他)、テレビ(France2 他)などメディアを通

して、フランス現代事情を考える。また、常に思想界をリードするフランス現代哲学にもおりにつけ触れる。後者は社会現象を表面的にではなく深くとらえる助けとなってくれるはずだ。そのため、本科目ではフランス語を理解することが受講のための必須条件である。

● 学修到達目標

物事を表面的なことにとどまらず抽象的に考える力を養う。人間社会は結局、抽象概念で動いているからである。

● 講義計画

第1週 時事問題と討議

第2週 同上

第3週 同上

第4週 同上

第5週 同上

第6週 同上

第7週 小論文

第8週 時事問題と討議

第9週 同上

第10週 同上

第11週 同上

第12週 同上

第13週 同上

第14週 同上

第15週 小論文

第16週 総括

● 事前事後学習

とにかくフランス語の能力を磨くことに励んでほしい。

● テキスト

逐次手渡す。

● 成績評価方法

受講態度70%、小論文30%といった割合。受講中は積極的に発言することを求む。

国際機構特論

国際情勢の変化における多国間機構の役割

中野 有

● 講義概要

本講義は、激動する国際情勢の変化における国際機構の役割を多角的・重層的視点で理解し、国際機構の基礎理論を習得することを目的とする。出来るだけ分かり易い講義を理論と実務の統合を重視したアクティブラーニング形式で行う。

今、世界は、予測できなかったパンデミックにより大きく揺れ動いている。加えて、米中による技術や貿易の覇権争いや北朝鮮問題を抱える東アジアの不確実性は高い。加えて米国のトランプ政権の「アメリカ・ファースト」から、バイデン新政権による「多国間主義や地球環境問題に重心を置く」政策へと大きくパラダイムがシフトしており、世界の経済・社会・外交・安全保障に新たな潮流が発生している。このような変化の中、国際環境に適応できる国際機関の役割について考察することが重要である。

講義の達成目標は、国連機構を基軸とする平和構築の探求にある。講師の20年以上の中東、オーストラリア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカの海外駐在のフィールド経験、加えてウィーンに本部のある国連工業開発機構や世界のトップクラスのシンクタンクであるブルッキングス研究所、東西センターや開発コンサルタントの多角的な経験はベースに、単なるアカデミズムの探究のみならず、実践的であり、現在進行形の地政学的研究を通じ世界の潮流を把握するのに役立つ講義を行う。

● 学修到達目標

国際情勢の変化を多角的・重層的視点で洞察する能力を養う。現在進行形の国際事情に精通することができる。自分の頭で考え国際協力に関するビジョンを形成。

● 講義計画

- 第1週 ガイダンス
- 第2週 国際機構の諸理論
- 第3週 グローバル・イングリッシュ
- 第4週 リベラルアーツ、哲学的考察
- 第5週 国連機構 アフリカ、途上国の開発
- 第6週 地球環境問題、エネルギー安全保障 食糧の安全保障
- 第7週 国連外交、予防外交、人間の安全保障、ソフトパワー、スマートパワー
- 第8週 米国のシンクタンク、多国間外交
- 第9週 日本と国連外交
- 第10週 国際機構の基礎理論の構築
- 第11週 国連機構 ケーススタディ
- 第12週 国連機構 ケーススタディ
- 第13週 国連機構 ケーススタディ
- 第14週 総括
- 第15週 総括
- 第16週 プレゼンテーション

● 事前事後学習

国際情勢の変化を観察するために、新聞(朝日、読売、日経、毎日、産経、ニューヨークタイムズ)の社説を読む。また CNN,BBC のニュースを観る。事前事後ともこの習慣を継続する。

● テキスト

国際関係に関する文献のエッセンスを約 30 配布する

● 参考資料

ガイダンスにて説明

● 成績評価方法

出席 プレゼンテーション 100 点

● その他留意事項

自分の頭で考え、多くの文献に精通し、積極的にプレゼンテーションする能力を養う。

アジア中国関係特論

東アジアにおける異文化交流 ―中国文化との接触とその受容―

黄 名時

● 講義概要

本講義では、古代より現代にいたる「中国の文化と社会」を対象とする研究授業を行う。当面は、東アジアの文化の形成に多大な影響を与えた隋唐の文化・文化遺産を複数の分野から多面的に検討し、その文化的特質について理解を深める。

とりわけ、隋唐の圧倒的文化的影響を受けつつ独自の文化を形成した古代日本と日中文化交流史を概観し、日中両者の共通性と独自性にかかわる今日的課題を探究する。

現代中国語の諸文献・古典史料・考古資料の中からテーマ別に題材を取り上げて講義を行う。隋唐と飛鳥・奈良時代の文化財・文化遺産に関連する図録・写真・DVD などのビジュアル資料も併せて用いる予定である。

「遣隋・遣唐使時代の中国とその文化遺産」をメインテーマに講義するが、「中国大陆から見た日本」「日本人の中国観」「外国人の日本観」などのサブテーマも予定している。授業は受講生の関心対象を考慮して進める。

● 学修到達目標

日本は古くから一衣帯水の中国大陆と密接にかかわりながら発展してきた。この授業では講義と討議をとおして、受講生が中国古代文化の特質について理解を深め、日本古代における中国文化の受容と日中文化交流の歴史を把握することを目標とする。

● 講義計画

1)唐長安城と奈良平城京Ⅰ・Ⅱ、2)唐の詩と小説Ⅰ・Ⅱ、3)玄宗皇帝と楊貴妃Ⅰ・Ⅱ、4)隋唐墓と副葬品Ⅰ・Ⅱ、5)隋唐の鏡Ⅰ・Ⅱ、6)唐鏡と和鏡Ⅰ・Ⅱ、7)大唐文化の摂取と吸収Ⅰ・Ⅱ、8)奈良・正倉院に伝わる隋唐の至宝Ⅰ・Ⅱ

● 事前事後学習

隋唐の歴史文化について事前に一定の知識を得ておく必要があるため、参考文献に示された資料等を読んでおくことが望まれる。また事後学習として、講義要点の復習のほか、特に文献資料の主題関連項目を再度確認しておくことが求められる。

● テキスト

『遣唐使時代の日本と中国』江上波夫、小学館

『日中交渉史－文化交流の二千年－』山口修、東方書店

● 参考資料

『中国文化史大事典』黄名時ほか、大修館書店

《隋唐文化》王仁波、学林出版社

《中华文明之光》(第二辑:唐宋元)袁行霈、北京大学出版社

《古代的中国と日本》汪向榮、三聯書店

『考古学でつづる世界史』『考古学でつづる日本史』藤本強、同成社

《如此日本人》王志強、中央編譯出版社

【日中文化交流史叢書】池田温ほか、大修館書店

『正倉院寶物』NHK、ポニーキャニオン

● 成績評価方法

平常の授業発表と期末レポートで総合的に評価する。

アジア中国社会文化特論

陳 学超

● 講義概要

本講義では、アジア中国社会文化における重要な論題を深く討論すると共に講義する。その内容は、以下の三点を含めている。(1)中国の古代と近代における漢字の発展と変遷。(2)中国文学思潮の発展と変化。(3)中国社会や歴史における代表的な「漢唐景観」と「五四新文化運動」。また、魯迅を代表とする作家たちの思想と作品を分析することや、中日両国における礼儀や風俗の差異を比較して分析することや、漢字や書道に関する芸術と技法を演習しながら検討することなど。授業は、受講生の専門、研究テーマ、学問的関心などを考慮に入れて進めていく。

● 学修到達目標

受講生が日本人院生の場合、中国の社会文化に関する知識を広げ、その他の留学生の場合、中国の社会文化や伝統芸術についての知識を幅広く広げることにより、相互理解を深め、学問における研究方法や問題の思考方法を目標とする。

● 講義計画

第1週 序論:世界文明と中国社会文化

第2週 漢字の発展と変遷(古代)

第3週 漢字の発展と変遷(近代)

第4週 中国古代における文学思潮の発展と変遷(古代)

第5週 中国近代における文学思潮の発展と変遷(近代)

第6週 中国の社会文化についての研究:「漢唐景観」

第7週 中国の社会文化についての研究:「五四新文化運動」

第8週 魯迅の研究(1)

- 第9週 鲁迅の研究(2)
- 第10週 二十世纪九十年代における中国の散文主潮
- 第11週 ノーベル文学賞と中国作家
- 第12週 中日両国における礼儀と風俗の比較
- 第13週 漢字の書道芸術についての演習(1)
- 第14週 漢字の書道技法についての演習(2)
- 第15週 総括討論
- 第16週 プレゼンテーション

● 事前事後学習

下記の4点について事前の予習が必要です。

- 1.中国の漢字と書道の基本的な知識について
- 2.異文化間コミュニケーションの基本知識、および日中比較文化の常識について
- 3.鲁迅と中国現代文学史に関する知識について
- 4.東アジア文明史に関する知識について

下記の4点について事後の復習が必要です：

- 1.漢字の楷書、行書、草書の習字練習
- 2.日中の漢字の比較学習
- 3.日中比較文化の調査研究
- 4.修士論文に関するテーマ別ディスカッション

● テキスト

講義時に配布

● 参考資料

授業の中で紹介する

● 成績評価方法

出席、授業参加、発表、討議、実力テキストで総合的に評価する。

● その他留意事項

出席すること。就活や通院などの事情がある場合、出席数を考慮しますので、事前の連絡はしてください。

国際移民特論

佐竹眞明

● 講義概要

本研究では、国際移民の特質を考えていく。日本における移民の諸問題を考えていく。日本の移民の特質、特徴、を概観した後、国際結婚を取り上げる。

● 学修到達目標

日本の移民の特質が理解できる。

日本の国際結婚の特質が理解できる。

● 講義計画

- 第1週 日本の移民の概況①（教員講義）
- 第2週 同②（教員講義）
- 第3週 移民問題の先駆的事例 在日韓国・朝鮮人 ①（教員講義）
- 第4週 同②（教員講義）
- 第5週 移民問題の事例 在日フィリピン人①（教員講義）
- 第6週 同②（教員講義）
- 第7週 国際結婚 概況①（教員講義）
- 第8週 同 ②（教員講義）
- 第9週 日中結婚（学生発表）
- 第10週 日比結婚（学生発表）
- 第11週 日韓結婚（学生発表）
- 第12週 国際結婚で生まれる子ども（学生発表）
- 第13週 日中結婚で生まれた子ども（学生発表）
- 第14週 日比結婚で生まれた子ども（学生発表）
- 第15週 国際結婚 まとめ
- 第16週 予備

● 事前事後学習

教科書を読むこと

● テキスト

佐竹眞明 金愛慶『国際結婚と多文化共生—多文化家族の支援にむけて』明石書店、2017

● 成績評価方法

発表 ccsレポート

● その他留意事項

スケジュールは学生の出身地によって、変えることがあります。

異文化間コミュニケーション特論

（リレー講義）黄 名時・長田こずえ・山本淑雄

● 講義概要

本講義はグローバル時代の国際文化の概念とあり方を考察するとともに、具体的な事例を紹介しつつ、(i) 文化のグローバル化と (ii) 文化・文明の衝突という裏表の同一問題に言及するものである。授業のプロセスとしては、東アジア・中国、アメリカ・米国とカナダ、ヨーロッパ・ドイツの3地域4か国を取り上げ、諸地域・諸国の文化的特質を論じながら、グローバルな文化への理解を深める。それぞれの民族や国家の歴史的な特質、文化的価値観・社会規範、デモグラフィックな傾向、言語やコミュニケーションパターンなどを紹介しながら、グローバル文化の多様性と複雑性、異質性と共通性、文化のダイナミズム、同化と融合、国々の抱えているチャレンジなどを基礎として学び

ながら、グローバリゼーションの本質と、その中で生き抜く手段としての異文化コミュニケーションのツールを理解することが目的である。講義は3名の教授によるオムニバス形式で行うが、内容については基本的には、下記の講義テーマに即して展開される。

● 学修到達目標

この授業は国際文化、国際協力や国際支援に関するすべての授業の基礎をなすものであり、個別的な地域、対象者、固有の文化に分化した国際理解学習の前提でもある。したがって学習者には世界の現状を大まかに捉えるために必要な実学的な視点を持つことができるようになることが求められる。対象地のコミュニケーションパターンを理解するために、ごく初歩的な言語や挨拶も紹介する。対象地域の情報を、言語的、地理的、政治的、宗教的、文化的、あるいは経済社会的背景とともに、それぞれの社会のダイナミズムや、マイノリティー文化やサブカルチャーなども理解したうえで、グローバル社会に生きる我々が生き延びる手段として必要な異文化コミュニケーションツールを学ぶ。それは学習者自身が世界の変化や躍動に敏感に反応し、大学院での学びを通して院生たち自身が、共存を前提とするコミュニケーターとして、現実世界を率先するエージェントに育っていくという、非常に体験型の学びの場を意味する。

● 講義計画

(黄 名時)

第1週(第1回、第2回)

講義ガイダンス、日中の異文化間コミュニケーション概論

異文化間コミュニケーションの形態と方法(日中間交流の伝統的形態、異文化における語学習得・文化理解、異文化の実体験・留学体験)

第2週(第3回、第4回)

日中異文化間コミュニケーションのテクニックと実践

異言語トレーニングと話術・スピーチの奥義

第3週(第5回、第6回)

越境する日中文化交流、文学作品・映画・漫画・アニメなど文化媒体による日中異文化間コミュニケーションの現状と課題、まとめと小テスト

(長田こずえ)

第4週(第7回、第8回)

北米のオリエンテーション 北米における異文化コミュニケーションの歴史と発展

北米の文化・サブカルチャー、社会経済事情、言語、政治、ダイナミズム、移民など

第5週(第9回、第10回)

北米における言語コミュニケーションと非言語コミュニケーション

北米のグローバル化した世界への異文化接触とコミュニケーション阻害要因

第6週(第11回)

マスメディア、メディアコミュニケーションと北米文化、まとめと小テスト

(山本淑雄)

第7週(第12回、第13回)

ドイツと日本、文化交流の歴史

ドイツにおける異文化コミュニケーションの問題、移民問題等

第8週(第14回、第15回)

ドイツにおける文化のグローバル化

ドイツにおけるサブカルチャー

第9週(第16回)

ドイツにおける異文化交流、日本文化の影響、まとめと小テスト

● 事前事後学習

国際学習は地域学習の積み重ねであるから、授業前に当該学修地域に関する基礎的情報(言語、社会経済事情、デモグラフィック、地理的位置、歴史の概略、政治事情)などについての知識を得ておくことが求められる。そのためには、毎日、国際ニュースを見たり読んだりすることが求められる。新聞やネットなどを見て、国際情勢を学ぶことも奨励される。

● テキスト

特に指定しないが、授業中に参考にするのが望ましい書籍・資料などを紹介する。一部の授業では、マルチメディア情報を駆使しDVDや衛星テレビなども使用する。

● 参考資料

授業中に紹介する。

● 成績評価方法

授業に臨む態度を基礎条件とする平常点(10%)と、それぞれの教員が実施する小テストの成績の合計(90%)で評価する。

● その他留意事項

すべての授業に遅刻することなく出席すること、および授業中は教員の発言を理解にとどめることができるようにノートを取り、次の授業に備えて当該地域に関する予習などを行うことが求められる。各教員のまとめのテストを必ず受けること。

国際文化特論

張 勤

● 講義概要(Course Description)

グローバルが進むこんにちにおいて、社会構成員の行動様式と生活様式を規制するそれぞれの社会の固有文化は、地域や国の境界を超えて、お互いに干渉し合い、共存する方向へと進んでいます。国際的な視野から文化事象を観察することが求められると同時に、国際関係、民族、宗教、移民、言語などを論ずるに当たって、異文化共存も極めて重要なポイントとなります。

この講義は、国際的な視野から文化事象を観察し、異文化共存のあり方について考えていき、そこに存在する問題を把握し、認識を深めることを目的とします。

講義は、関係論文を読み、発表し、討論する形で行います。初回の授業で、メンバーの状況を確認した上で進め方を決めます。

● 学修到達目標(Main Goals)

グローバル化が進む中、異なる文化が如何に干渉し合うことについて認識を深めている。

異文化共存に如何なる問題が存在するかについて把握している。

異文化コミュニケーションのポイントと可能性について理解を深めている。

● 講義計画(Course Schedule)

第1週 オリエンテーション・講義の進め方／文化とコミュニケーション

第2週 グローバル化と言語・文化

第3週 ことばで伝えられるものと伝えられないもの

第4週 外国語の習得とコミュニケーション

第5週 異文化コミュニケーションとしての通訳と翻訳

第6週 同一文化コミュニケーションと異文化コミュニケーション

第7週 非言語コミュニケーション

第8週 異文化コミュニケーションから学ぶ／まとめ

● 事前事後学習(Preparation and Review)

講義の予習と復習は、授業の倍から二倍の時間が必要です。

講義の前に教材(プリント配布)を読んでおき、内容について自分の考えをまとめてから講義に臨んでください。講義終了後、示された課題について調べ、考えをまとめてください。

● テキスト(Required Textbooks)

初回の授業でプリントを配布します。

● 参考資料(References)

エドワード T.ホール, 1966,『沈黙のことば—文化・行動・思考』國弘正雄訳, 南雲堂.

コンドン, 1980,『異文化コミュニケーション』, サイマル出版会.

D.マツモト, 2001,『文化と心理学』, 北大路書房.

小坂貴志, 2007,『異文化コミュニケーションの AtoZ—理論と実践の両面からわかる—』, 研究社.

上記以外に、授業中に指定するものもあります。

● 成績評価方法(Evaluation)

授業参加(50%)

課題レポート(25%)

事前事後学習(25%)

● その他留意事項(Other Matters)

講義では積極的に思索し、発言してください。欠席はしないこと。

日本文化特論

鹿毛敏夫

● 講義概要

日本の文化は、周辺のアジア諸国・諸地域との接触のなかで育まれてきた。日本と日本人の歴史文化を考えるうえでアジアとの交流と相互影響の考察は欠かせない視点であり、現代の複雑な国際関係を理解するためにも、過去のアジア交流についての正確な理解が必要である。本講義では、前近代における日本とアジア諸国・諸地域との文化交流の歴史を東アジアから東南アジアにまたがる環シナ海文化圏の広がりの中で考察・理解する。

● 学修到達目標

前近代における日本とアジア諸国・諸地域との文化交流の歴史を理解し、アジア世界における日本文化の位置づけを史的背景のもとに考察・説明することができる。

● 講義計画

- 第1週 日本文化と唐・宋・元
- 第2週 室町文化と中華
- 第3週 日明関係
- 第4週 守護大名の遣明船派遣
- 第5週 遣明船と倭寇
- 第6週 遣明船は何を運んだか
- 第7週 九州産硫黄の爆売り
- 第8週 硫黄産地の社会構造
- 第9週 「サルファーラッシュ」から「シルバーラッシュ」へ
- 第10週 渡来「唐人」の活動
- 第11週 「唐人」仏師と豊臣政権
- 第12週 中世社会の唐人文化
- 第13週 九州大名の東南アジア外交
- 第14週 南蛮文化
- 第15週 アジアン大名とキリシタン大名
- 第16週 アジアのなかの日本文化

● 事前事後学習

各回での学習事項を復習し、次回のテーマについてテキストを読んで予習をしてくる。発表者はプレゼンテーション資料を適切にまとめること。

● テキスト

鹿毛敏夫著『アジアのなかの戦国大名―西国の群雄と経営戦略―』吉川弘文館、2015

● 参考資料

羽田正著『新しい世界史へ―地球市民のための構想―』岩波書店、2011

村井章介著『増補中世日本の内と外』筑摩書房、2013

● 成績評価方法

平常点70% (課題発表40% ディスカッション30%)、レポート30%

多文化共生特論

長田 こそえ

● 講義概要

本講義は、履修者が多文化共生の方向性について学ぶものである。特にグローバル社会における様々な課題を扱う。国際移民、テロや災害、多文化共生、文明の衝突、EU などの地域機構と国連の役割、人権やジェンダー、人種差別などグローバリゼーションなどに関わる社会理論や研究方法を学びながら、履修者が自分の研究スタイルを磨き、自分が選んだ課題における論文執筆に活かすことを目指す。また、国境を越えた多文化社会だけではなく、日本国内のアイヌや沖縄などのマイノリティの課題、性的なマイノリティとかれらのオリエンテーション、障害者と障害文化などの多面的な多文化共生を学ぶことをも目的とする。

本講義は、以下にあげるテキスト、英語と日本語の関連論文の輪読とディスカッションを中心に行う。履修者は、毎回文献資料を読みこなし、コメントを考えてくること。授業中に報告および問題提起を行うことも期待される。なお、本授業では必要に応じて、履修者、あるいは外部のスピーカーによる研究報告の時間を設けることがある。試験はないが、自分が選んだ多文化共生の課題に関するレポートを提出する。

● 学修到達目標

履修者が多文化社会の概念と研究方法を習得すること。グローバリゼーションや国内のマイノリティ文化に関する課題について、ポストモダニズムの観点から理解することを目指す。

● 講義計画

- 第1週 授業ガイダンスとオリエンテーション
- 第2週 ポストモダニズム的アプローチについて
- 第3週 グローバリゼーションと多文化社会概要
- 第4週 人口移動と移民
- 第5週 テロ、戦争、災害、難民
- 第6週 日本の HAFU や外国人が抱える課題
- 第7週 日本のマイノリティ文化 -アイヌ、琉球、地域文化、方言
- 第8週 文明の衝突と宗教—キリスト教、イスラム教、仏教、ヒンズー教
- 第9週 [サミュエル ハンチントンの文明の衝突]について
- 第10週 性的マイノリティとセクシャルオリエンテーションの課題
- 第11週 障害者と障害者文化
- 第12週 異文化共生、国連 SDG, ユネスコ ESD
- 第13週 格差の問題 -開発途上国、BRIC・中進国、先進国の格差と経済成長

第 14 週 グローバル主義と地域・国際機構の役割

第 15 週 米国や欧州のナショナリズム台頭と新人種差別に関する課題

第 16 週 総括

● 事前事後学習

【事前学習】

毎回の授業までにテキストや資料を熟読すること。そのうえで内容を確認し、授業で発言するコメントを考えておくこと。報告担当となった場合は、報告 PowerPoint を作成して授業に持参すること。普段から国際 NEWS を見て国際感覚を磨くこと。基礎的な英語を理解するため、英検 2 程度の力を養うこと。

【事後学習】

授業で得た理論的知見や研究方法をもとに、自身の研究をブラッシュアップすること。また、授業で理論的に学んだことを自分の人生の中で実践し、それについて明確に語ることが出来ること。

● テキスト

1. [多文化社会、人が変わる、社会を変える] - 松尾慎編集、凡人社
2. [文明の衝突と 21 世紀の日本] - サミュエル ハンチントン 集英社

● 参考資料

必要に応じて配布。

● 成績評価方法

授業での発言・質疑・コメントなど 60%、課題レポートなど 40%

国際言語教育特論

Ikumi Imani

今仁 生美

● 講義概要

この講義では、国際化が進む現代社会の中で不可欠の要素となっている言語教育の理論と実践を学び、実際の場面において高度な技術力を伴った言語教育を行うことができる能力を養うことを目的とする。さらに、現在の日本で行われている日本語教育の現状や問題を取り上げそれらの考察・分析を行う。特に問題点に関してはその解決法について受講生と共に考えていく。

日本における日本語教育は手探り状態で始まったが、現在は、日本語を含む言語教育に関する方法論も開発されつつある。こういった状況を踏まえて、講義を以下のように進めていく予定である。まず言語教育の基本理論(特に教授法)を学んだ上で、日本に加えアジア、欧米などでの海外での日本語教育について調査を行い(これは学生の課題としそれに基づき)議論を行う。次いで、実際に日本語を教授する際の技術を学ぶために、日本語初級・中級・上級者を対象とした言語教育についてそこに見られる問題点を学生と探る。学生は、前半で学んだ教授法を用いた授業を実際に教室内で行うことで実践力を身につける。

● 学修到達目標

日本語教育の現状を把握すると共に、日本語教育の方法論の基本を理解し、関連する論文を十分に読みこなす力をつけることを目標とする。

● 講義計画

- 第1週 導入
- 第2週 言語教育概論1
- 第3週 言語教育概論2
- 第4週 言語教育概論3
- 第5週 言語教育概論4
- 第6週 言語教育概論5
- 第7週 海外における日本語教育1
- 第8週 海外における日本語教育2
- 第9週 日本語初級者に対する言語教育1(デモによる実践)
- 第10週 日本語初級者に対する言語教育2(デモによる実践)
- 第11週 日本語初級者に対する言語教育3(デモによる実践)
- 第12週 日本語中級者に対する言語教育1(デモによる実践)
- 第13週 日本語中級者に対する言語教育2(デモによる実践)
- 第14週 日本語上級者に対する言語教育3(デモによる実践)
- 第15週 総括

①学修を進めるうえで重要なポイント

データを単に集めるのではなく、体系的に、かつ、説明的に資料を作成すること

②課題と提出期限

課題はほぼ毎回課す。提出は翌週の授業時に行う。

③課題の取り組み方

関連する本や論文をなるべく多く読み、実践に実際に役に立つ資料を作るよう心掛けること

④試験

課題を試験の代わりとする。

● 事前事後学習

授業の実践を中心に行うため、事前に何度も自分で授業のプレゼンテーションを練習しておいてほしい。授業後は、授業中に指摘されたことなどを整理・理解し、次のよりよいプレゼンテーションにつなげていくこと。

● テキスト

テキストは、授業開始後、必要に応じて指定する。またコピーも授業中に配布する。

● 参考資料

授業中に適宜参考文献を提示する。また、関連資料のプリントも配布する。

● 成績評価方法

出席50%、および、レポート(課題)と授業への参加貢献度50%

日本語教授法特論

Ikumi Imani

今仁 生美

● 講義概要

この講義では、日本語を日本語学習者に教える際の技術を学ぶことを主な目的とする。

日本語を母語とする者が日本語を教えるのは思いのほか難しいことが多い。そのため授業で用いる配布資料の質を高め、効果的な授業を実施することができるようにする必要がある。本講義では、このような背景を踏まえ、日本語教授法の基礎を解説した後、テキスト研究を集中的に行う。その後、授業で配布する資料を受講生が実際に作成し、それに関して具体的な指導を行う。最後に、授業を実際に行う場面を設け(受講生による実践)、教授方法に対する技術指導を行う。

● 学修到達目標

日本語の言語学的な基本を把握し、また、日本語を現場で教授する際の基本的な技術を身に付けることを目標とする。

● 講義計画

第1週 導入

第2週 日本語教授法概論1

第3週 日本語教授法概論2

第4週 テキスト研究1

第5週 テキスト研究2

第6週 テキスト研究3

第7週 授業配布資料作成実践(初級用)

第8週 授業配布資料作成実践(初級用)

第9週 授業配布資料作成実践(初級用)

第10週 授業配布資料作成実践(中級用)

第11週 授業配布資料作成実践(中級用)

第12週 授業配布資料作成実践(上級用)

第13週 教授実践指導

第14週 教授実践指導

第15週 教授実践指導

①学修を進めるうえで重要なポイント

データを単に集めるのではなく、体系的に、かつ、説明的に資料を作成すること

②課題と提出期限

課題はほぼ毎回課す。提出は翌週の授業時に行う。

③課題の取り組み方

関連する本や論文をなるべく多く読み、実践に実際に役に立つ資料を作るよう心掛けること

④試験

課題を試験の代わりとする。

● 事前事後学習

授業配布資料作成をほぼ毎回行うことになる。「分かりやすさ」と正確さを目指して作成してほしい。授業の後は、自分が作成した資料で不足していた点などを必ず補っておくこと。

● テキスト

テキストは、授業開始後、必要に応じて指定する。またコピーも授業中に配布する。

● 参考資料

授業中に適宜参考文献を提示する。また、関連資料のプリントも配布する。

● 成績評価方法

出席50%、および、レポートと授業への参加貢献度50%

宗教・思想・文化特論

高見 伊三男

● 講義概要

キリスト倫理について、キリスト教の正典である「聖書」を通して学んでいきます。その聖書における倫理については、三大徳として、「信仰」と「希望」と「愛」が挙げられます。それらの三つの徳は特に新約聖書において頻出しています。しかしそれらの三大徳の中でも、さらに「愛」が中心的徳(最も大いなるもの)だと言えます。聖書における愛は、その原語のギリシア語にちなんで「アガペー」の愛と呼ばれています。この愛は、積極的な他者中心的愛・他者贈与的愛です。このアガペーの愛は、神の(最愛の)御子・救い主(王)・イエス・キリストによって決定的・究極的・模範的に確証されております。このイエス・キリストへの信仰と希望に支えられてそうしたアガペーの愛が豊かに恵まれてきます。さらに、そのアガペーの愛を土台としながら、さまざまな具体的な関係愛、たとえば、夫婦愛(恋愛)、家族愛(親子愛・兄弟愛)、友愛(友情)、国家愛(民族愛)、などについて、聖書を通して具体的に学んでいきます。

● 学修到達目標

上記の概要の要約としての、本学の建学の精神であるイエス・キリストによる「敬神愛人」について考察し、これを今後の各自の大学生活さらには人生において常に覚えて、生かしていくことを目標にしています。

● 講義計画

- 第1週 キリスト教倫理と「聖書における愛」
- 第2週 序論―「アガペー」(聖書の代表的愛)と他のギリシア語の愛
- 第3週 父なる神の恩愛
- 第4週 神の御子の愛
- 第5週 信仰・希望・愛―聖書の三大徳―
- 第6週 「敬神愛人①」―本学の建学の精神①―
- 第7週 「敬神愛人②」―本学の建学の精神②―
- 第8週 さまざまな隣人愛
- 第9週 自己愛の解釈
- 第10週 聖書の夫婦愛(恋愛)
- 第11週 聖書の家族愛(親子愛・兄弟愛)
- 第12週 聖書の友愛(友情)
- 第13週 聖書の国家愛(民族愛)
- 第14週 聖書の自然愛(恵みと有限)
- 第15週 聖書の物質愛(恵みと誘惑)
- 第16週 定期試験期間(無し)

● 事前事後学習

本授業は、『聖書』を教科書としていますので、各回のテーマについて聖書の中から主な3-4箇所をプリントに引用したものを学びます。そうしたプリントを通して聖書を学ぶことも大切ですが、さらに聖書を広く読んでおくことも役に立つでしょう。特に「旧約聖書」においては最初の「創世記」「出エジプト記」等、また「新約聖書」においては「4つの福音書」や「使徒言行録」「13のパウロ書簡」等を読んだりすると、より理解が深まると思います。ともかく、聖書(キリスト教正典・古典・ベストセラー)は The Book とも言われていて「本の中の王様」ですので、大学時代だけでなく生涯にわたって親しんでいくようにしてください。

● テキスト

- ・教科書:『聖書―新共同訳(ハンディバイブル)―』日本聖書協会
- ・プリント:毎週自前のものを配布します。

● 参考資料

- 参考書:高見伊三男『聖書における愛―イエスの愛とパウロの愛―』春風社、2011年
- ：K. バルト『キリスト教倫理 I II III IV』鈴木・村上・佐々木訳、新教出版社、1971年
 - ：C. S. ルイス『四つの愛』佐柳訳、新教出版社、2011年
 - ：A. ニーグレン『アガペーとエロース I II III』岸・大内訳、新教出版社、1954年

● 成績評価方法

〈対面授業〉平常点(7点/回×回数)+授業中の加点(聖書朗読・質問正解等)+〈非対面授業〉平常点(7点/回×他回:毎回 Minute Paper の回答で確認:200-400字内の資料要約:各授業日の終わりまでに提出)+チャペル・アワー(本学 HP の YouTube で毎週火曜 13:00 以降配信:3点ずつのボーナス点を加点:Minute Paper の感想で確認:100-200字内:2回目以上は追加・再提出)+日本基督(キリスト)教団の諸教会の日曜礼拝(AM10:00-)(3点ずつのボーナス点を加点:

「教会週報」をもらって送信することで確認:CCS の上欄の「メール」で送信)＝総合点。

● その他留意事項

本学はキリスト教主義の大学ですので、授業の他に大学のチャペルやキリスト教会の礼拝に出席することを奨励しています。チャペル・アワー(毎週火曜 13:00-13:30:3点ずつのボーナス点を加点)や日本基督(キリスト)教団の諸教会の日曜礼拝(AM10:00-) (3点ずつのボーナス点を加点)に出席すると、それぞれ 3 点ずつのボーナス点が獲得できます。詳しくは、上記の成績評価方法を見てください。

研究方法論

佐竹 眞明

● 講義概要

国際文化協力専攻の修士課程に入学した諸君は所定の授業を履修し、さらに、修士論文を執筆しなければならない。共通科目、国際文化、国際文化協力の分野において、学問を深め、自分の関心に基づいて修士論文を執筆する。このように、学部を修了した諸君は専門の研究に入っていくこととなる。

この授業では研究のスタートにたった諸君が修士論文を執筆するために身につけなければならない思考方法、倫理などについて、検討していく。独自の思考に基づき、独創性を持ち、説得力を持ち、論文を組み立てる必要がある。今年度は梅野潤子著『研究ってなんだろう—はじめて取り組むあなたのための論文作成ノート』(高管出版、2013)を用いながら、研究姿勢、思考方法、論文作成の方法を学習していく。また、受講生に研究計画を報告してもらい、研究方法上の助言を提供する。

● 学修到達目標

- ・受講生は自分の研究の意義、目的を説明できることができる。
- ・受講生は研究方法の基礎を習得する。
- ・受講生は修士論文を執筆する基本的な方法を習得する。

● 事前事後学習

教科書『研究ってなんだろう』の「はじめに」を読んでおいてください。

● 講義計画

第1週 プロローグ 自己紹介 授業の進め方説明

第2週 ・テキスト第1章 研究について考えよう—準備編 1節 研究って何だろう

第3週 2節 研究の全体像をつかもう

第4週 3節 研究を始めるために準備しよう

第5週 第2章 研究を進めよう—実践編 1節研究テーマを決める

第6週 2節 先行研究のレビュー

第7週 3節 研究計画を立てる

第8週 同

第9週 受講生による研究計画 発表

- 第10週 同
- 第11週 4節 調査の実施
- 第12週 5節 分析・考察
- 第13週 6節 論文としてまとめる
- 第14週 7節 実践につなげる
- 第15週 予備(授業内容に関するシェアリング)

● テキスト

梅野潤子著『研究ってなんだろう—はじめて取り組むあなたのための論文作成ノート』(高管出版、2013) 定価本体 1500 円＋税 丸善にて購入し、授業初回に持参すること。

参考書

小池和男『聞きとりの作法』東洋経済新報社、2000

甲斐田万智子・佐竹眞明・長津一史・幡谷則子編著『小さな民のグローバル学—共生の思想と実践を求めて』上智大学出版、2016.

佐竹眞明編著『国際結婚と多文化共生—多文化家族への支援』、明石書店、2017

● 成績評価方法

授業への参加度を重視する。レポート。

国際文化協力特別研究Ⅰ(日本歴史・文化)

鹿毛敏夫

● 演習概要(研究テーマ:日本の歴史・文化の研究)

日本の歴史の展開過程を総合的に考察するとともに、特に日本史特有の「武家社会」の特質を取りあげて、その文化的背景とともに合理的に理解する。また、歴史文学作品を講読して、その正確な内容理解に努めるとともに、史実に沿った批判的考察を進め、時代の認識や捉え方について議論を深める。演習を通して、論理的思考力を培い、みずから史料を分析・考察して歴史研究を進める技術と能力を高める。

● 学修到達目標

日本史の史的展開過程における「武家」の時代の特徴を理解するとともに、日本の歴史と文化への関心を深め、先行研究を踏まえながら自身の論文執筆への明確な意識を獲得することを目標とする。

● 演習計画

前期)

- 第1-2週 日本史研究の対象
- 第3-4週 時代の変遷と特徴
- 第5-6週 武家社会の特質
- 第7-8週 文学から史実を読み取る

- 第 9-10 週 文献講読①「武士」
- 第 11-12 週 文献講読②「戦国」
- 第 13-14 週 文献講読③「南蛮」
- 第 15-16 週 文献講読④「異文化」、
後期)
- 第 1-2 週 文献講読⑤「交易」
- 第 3-4 週 文献講読⑥「異宗教」
- 第 5-6 週 文献講読⑦「水軍」
- 第 7-8 週 文献講読⑧「京都」
- 第 9-10 週 文献講読⑨「豪商」
- 第 11-12 週 文献講読⑩「九州」
- 第 13-14 週 日本の歴史・文化の特質
- 第 15-16 週 演習の総括

● 事前事後学習

テキストを事前に講読し、不分明な歴史事象について調べておくとともに、毎回の講義で学習した内容を復習し、再確認しておく必要がある。

● テキスト

安部龍太郎著『宗麟の海』NHK出版、2017 年

● 参考資料

村井章介著『世界史のなかの戦国日本』筑摩書房、2012 年

鹿毛敏夫著『大航海時代のアジアと大友宗麟』海鳥社、2013 年

静永健編『東アジア海域に漕ぎだす 6 海がはぐくむ日本文化』東京大学出版会、
2014 年

● 成績評価方法

授業時の発表・討議と課題レポートで総合的に評価する。

国際文化協力特別研究Ⅰ（中国言語・文化）

黄 名時

● 演習概要（研究テーマ：中国の言語文化へのアプローチ）

本研究の前半は、中国の言語文化を対象とする研究方法論を説く。研究手法の導入として、研究テーマの設定、研究上の問題点、基本文献の渉猟、資料の扱い方、史料の評価について講義する。

後半は、個々の受講生の関心ある特定テーマや文化領域に沿って、関連する中国語および日本語の文献史料・調査報告書・学術論文等を提示するとともに、演習形式でこれを講読していく。受講生にそれぞれ課題について分担報告や発表をしてもらい、討議を重ねていく。授業時に、当

該領域の関連文献や基礎資料を紹介しながら研究指導を進める。

● 学修到達目標

受講生のテーマに基づく研究指導と演習を行うなかで、各自が先行研究をきちんと咀嚼し、自分の研究論文が書けるレベルにまで高めることを目標とする。

● 演習計画

- 第1週 中国の言語文化の対象
- 第2週 研究方法
- 第3週 研究テーマの設定
- 第4週 研究上の問題点
- 第5週 基本文献の探し方
- 第6週 資料の扱い方
- 第7週 史料などの評価
- 第8週 文献講読①
- 第9週 文献講読②
- 第10週 文献講読③
- 第11週 文献講読④
- 第12週 文献講読⑤
- 第13週 文献講読⑥
- 第14週 文献講読⑦
- 第15週 演習の総括

● 事前事後学習

参考文献に示した資料等を事前に自習しておくとともに、毎回の講義で学習した主題を復習し、重要点を再度確認しておく必要がある。

また各自、疑問点を整理して、次回の授業時に質問できるようにしておくことが求められる。

● テキスト

教室で指示する。

● 参考資料

- 『中国文化史大事典』黄名時ほか、大修館書店
- 『アジア歴史研究入門 中国』島田虔次、同朋社
- 『中国史研究入門』山根幸夫、山川出版社
- 【中国文化叢書】高木正一ほか、大修館書店

● 成績評価方法

授業時の発表・討議と課題レポートで総合的に評価する。

国際文化協力特別研究 I

佐竹 眞明

● 講義概要

国際文化協力専攻の修士課程に入学した諸君は所定の授業を履修し、さらに、修士論文を執筆しなければならない。共通科目、国際文化、国際文化協力の分野において、学問を深め、自分の関心に基づいて修士論文を執筆する。このように、学部を修了した諸君は専門の研究に入っていくこととなる。

この授業では研究のスタートにたった諸君が修士論文を執筆するために身につけなければならない思考方法、倫理などについて、検討していく。独自の思考に基づき、独創性を持ち、説得力を持ち、論文を組み立てる必要がある。今年度は梅野潤子著『研究ってなんだろう—はじめて取り組むあなたのための論文作成ノート』(高管出版、2013)を用いながら、研究姿勢、思考方法、論文作成の方法を学習していく。また、受講生に研究計画を報告してもらい、研究方法上の助言を提供する。

● 学修到達目標

- ・受講生は自分の研究の意義、目的を説明できることができる。
- ・受講生は研究方法の基礎を習得する。
- ・受講生は修士論文を執筆する基本的な方法を習得する。

● 事前事後学習

教科書『研究ってなんだろう』の「はじめに」を読んでおいてください。

● 講義計画

- 第1週 プロローグ 自己紹介 授業の進め方説明
- 第2週 テキスト第1章 研究について考えよう—準備編 1節 研究って何だろう
- 第3週 2節 研究の全体像をつかもう
- 第4週 3節 研究を始めるために準備しよう
- 第5週 第2章 研究を進めよう—実践編 1節 研究テーマを決める
- 第6週 2節 先行研究のレビュー
- 第7週 3節 研究計画を立てる
- 第8週 同
- 第9週 受講生による研究計画 発表
- 第10週 同
- 第11週 4節 調査の実施
- 第12週 5節 分析・考察
- 第13週 6節 論文としてまとめる
- 第14週 7節 実践につなげる
- 第15週 予備(授業内容に関するシェアリング)

● テキスト

梅野潤子著『研究ってなんだろう—はじめて取り組むあなたのための論文作成ノート』(高管出版、2013) 定価本体 1500 円＋税 丸善にて購入し、授業初回に持参すること。

● 参考書

小池和男『聞きとりの作法』東洋経済新報社、2000

甲斐田万智子・佐竹眞明・長津一史・幡谷則子編著『小さな民のグローバル学—共生の思想と実践を求めて』上智大学出版、2016.

佐竹眞明編著『在日外国人と多文化共生—地域コミュニティの視点から』、明石書店、2011

● 成績評価方法

授業への参加度を重視する。レポート。

国際文化協力特別研究 I (西洋思想・文化)

鈴木 啓司

● 講義概要(研究テーマ:フランス現代事情)

Le Monde, Le Point, France2 など、新聞、雑誌、テレビニュースなどを通して、フランスの現代事情を探ってゆく。さらには、常に世界の哲学思想界をリードするフランスの現代思想にも触れてみる。そのため、フランス語を解することが本科目を受講する絶対条件である。

● 学修到達目標

物事の表面だけに止まらず、その本質を深く探る抽象思考を身につけること。フランスは哲学を最も重んじる国でもある。そのうえで、説得的な学術論文を書くために必要な論理とデータ処理を学んでもらいたい。

● 講義計画

前期

- 第 1 週 ガイダンス
- 第 2 週 問題提起と討論
- 第 3 週 小論文
- 第 4 週 問題提起と討論
- 第 5 週 小論文
- 第 6 週 発表と討論
- 第 7 週 問題提起と討論
- 第 8 週 小論文
- 第 9 週 発表と討論
- 第 10 週 問題提起と討論
- 第 11 週 小論文
- 第 12 週 発表と討論
- 第 13 週 発表と討論

第14週 発表と討論

第15週 発表と討論

第16週 総括

後期

第1週 研究計画確認

第2週 問題提起と討論

第3週 小論文

第4週 問題提起と討論

第5週 小論文

第6週 発表と討論

第7週 問題提起と討論

第8週 小論文

第9週 発表と討論

第10週 問題提起と討論

第11週 小論文

第12週 発表と討論

第13週 発表と討論

第14週 発表と討論

第15週 発表と討論

第16週 総括

● **事前事後学習**

とにかくフランス語の能力を磨くことに励んでほしい。

● **テキスト**

講義時に適宜配布する。

● **成績評価法**

受講態度50% 小論文と発表50%

国際文化協力特別研究Ⅰ（国際開発協力・文化）

長田 こずえ

● **演習概要（研究テーマ：国際開発協力研究へのアプローチ）**

本研究の前半は、国際協力（特に国際開発協力）を対象とする研究・調査方法論を説く。研究手法の導入として、問題点の気付き、研究テーマの設定、仮設の設定、調査、基本方法（特にデータ収集と分析方法）、文献の渉猟、資料の扱い方、研究の限界、まとめ方について講義する。後半は、個々の受講生の関心ある特定テーマや領域に沿って、関連する国際協力に関する調査報告書・書籍、マルチメディア、学術論文等を提示するとともに、演習形式で学習グループで文献を

選択し、査読する。受講生にそれぞれの課題について分担報告や発表をしてもらい、アカデミックな討議や、建設的かつ批判的なコメントを全員でシェアする。前期、後期を通して、当該領域の関連文献や基礎資料を紹介しながら研究指導を進めると同時に、ピアーとの経験共有と参加型の学習をも重視する。

● 学修到達目標

各自のテーマに基づく研究指導と演習を行うなかで、受講生が関連のある問題点に気づき、課題を設定し、先行研究をきちんと咀嚼し、自分の研究論文が書けるレベルまで高めることを目標とする。

● 演習計画

第1週 国際協力と国際開発協力に関する理解

第2週 研究テーマと仮説の設定

第3週 研究方法と手法

第4週 データ収集と分析の仕方

第5週 基本文献の査読の仕方

第6週 資料の扱い方

第7週 参加型の調査方法の基礎理解

第8週 文献講読①

第9週 文献講読②

第10週 文献講読③

第11週 文献講読④

第12週 文献講読⑤

第13週 文献講読⑥

第14週 文献講読⑦

第15週 演習の総括と論文 Proposal 作成

● 事前事後学習

参考文献に示した資料等を事前に自習し、毎回、主題について学習したことを復習し再確認しておくことが求められる。また、刻々と変化する国際情勢に精通するため、TV やネットを使い、国際ニュースを見ることが望まれる。最低限の英語力、英検2級程度、を身につけることもプラスになる。

● テキスト

「社会科学系大学院生のための研究の進め方:修士、博士論文を書く前に」、ダン・レメニイ他、同文館出版、2002年

● 参考資料

「人間開発報告書2014年」 UNDP

その他は、教室で指示する。

● 成績評価方法

出席率、授業時の発表・討議と課題レポートで総合的に評価する。

国際文化協力特別研究Ⅰ（国際政治・文化）

増田 あゆみ

● 演習概要（研究テーマ：国際政治学研究）

本研究は、国際政治学を主とし、国際社会における現象を政治学の視座で、分析し、考察することを主たる目的とする。

研究の前半では、国際政治学の基本を基本的文献の講読、および議論をすることによって、熟知することに務める。研究の手法についても、この基本の修得に沿って、順次、研究テーマの設定、研究の方法論の検討等を考察していく。研究の後半においては、個々の受講生の研究テーマの設定、および、研究の経過報告を中心に、受講生間での議論を中心に、修士論文の指導を行う。

● 学修到達目標

受講生の研究テーマに基づいた実証的な研究を積み上げることができるようになること。

● 演習計画

前期

- 1) 国際政治学について
- 2) 研究テーマの設定について
- 3) 報告と議論
- 4) 指導
- 5) 報告と議論
- 6) 指導
- 7) 報告と議論
- 8) 指導
- 9) 報告と議論
- 10) 指導
- 11) 報告と議論
- 12) 指導
- 13) 研究テーマの検討
- 14) 研究テーマの検討
- 15) 総括

後期

- 1) 研究テーマの確認
- 2) 報告と議論
- 3) 指導
- 4) 研究テーマの確認

- 5) 報告と議論
- 6) 指導
- 7) 研究テーマの確認
- 8) 報告と議論
- 9) 指導
- 10) 研究テーマの確認
- 11) 報告と議論
- 12) 指導
- 13) 研究テーマの再検討
- 14) 指導
- 15) 総括

● 事前事後学習

事前においては、毎回の講義時に使用する文献の予習、事後においては、講義内容の復習を行うこと。

● テキスト

『国際関係論入門：思考の作法』 初瀬隆平編著、法律文化社 2012 年

● 参考資料

適宜、指示する。

● 成績評価方法

受講態度および修士論文において総合的に評価する。

国際文化協力特別研究Ⅰ（ドイツ文学・文化）

山本 淑雄

● 演習概要:ドイツ文学研究

ドイツ語圏の言語文化研究をテーマとして講義する。ドイツ文学への理解を深めながら、受講生が研究テーマを確立し、必要な文献を渉猟し、学術論文が作成できるよう指導していく。講義の後半ではテキストとして、ドイツ・ロマン主義の詩人ノヴァーリスの代表作《Heinrich von Ofterdingen》(邦訳名『青い花』)を精読し、ロマン主義の理念を理解するとともに、歴史的問題点にも視野を広げ、研究テーマ確立の一助とする。

● 学修到達目標

ドイツ語の文献を読解し、研究者としての基盤を確立する。

● 演習計画

- 1) ドイツ文学の世界 2) 古典主義とロマン主義 3) ドイツ理想主義
- 4) ドイツ文学におけるゲーテ 5) ゲーテとシラー 6) フランス革命の影響
- 7) フィヒテ哲学 8) ノヴァーリスの生涯 9) 死と再生 10) 秘儀としての恋

- 11) 研究テーマの確認 12) 文献渉猟 13) 研究発表① 14) 研究発表②
15) 総括

● **事前事後学習**

事前にテキストを熟読しておくこと。

● **テキスト**

Novalis: Heinrich von Ofterdingen (Reclam)

● **参考資料**

授業時に紹介する。

● **成績評価方法**

授業時の発表や課題レポートを基に総合的に評価する。

国際文化協力特別研究Ⅱ（日本歴史・文化）

鹿毛敏夫

● **演習概要（研究テーマ：日本の歴史・文化の研究）**

日本の歴史の展開過程を総合的に考察し、その文化的背景とともに合理的に理解する。また、史実に沿った批判的考察を進め、時代の認識や捉え方について議論を深める。演習を通して、論理的思考を深め、みずから史料を分析・考察して歴史研究を進め、その成果を修士論文としてまとめる。

● **学修到達目標**

日本の歴史と文化に関する先行研究を踏まえ、論理的思考を積み上げて、自身の修士論文を執筆・完成させることを目標とする。

● **演習計画**

前期)

第1-2週 研究主題の策定

第3-4週 研究の構想

第5-6週 研究課題の抽出

第7-8週 先行研究の批判的考察①

第9-10週 先行研究の批判的考察②

第11-12週 先行研究の批判的考察③

第13-14週 史料の読み込みと解釈①

第15-16週 史料の読み込みと解釈②

後期)

第1-2週 史料の読み込みと解釈③

第3-4週 史料の位置づけと評価①

第5-6週 史料の位置づけと評価②

- 第 7-8 週 史料群の有機的結び付け①
- 第 9-10 週 史料群の有機的結び付け②
- 第 11-12 週 論理的思考の展開
- 第 13-14 週 著述の修正と加筆
- 第 15-16 週 研究の総括

● 事前事後学習

先行研究を事前に講読して問題点を抽出し、論証に必要な歴史史料を熟読して解釈・評価しておく必要がある。事後には、成果と課題を整理し、論証過程を文章化しておく必要がある。

● テキスト

適宜提示する。

● 参考資料

- 佐藤信編『古代史講義』筑摩書房、2018 年
- 高橋典幸・五味文彦編『中世史講義』筑摩書房、2019 年

● 成績評価方法

授業時の発表・討議と修士論文で総合的に評価する。

国際文化協力特別研究Ⅱ（中国言語・文化）

黄 名時

● 演習概要（研究テーマ：中国古今の言語文化へのアプローチ）

本研究の前期では、「国際文化協力特別研究Ⅰ」につづいて修士論文作成のための演習を行っていく。

オリジナルな論文を執筆するためには、その分野における新しい視点での独創性・創意性が要求されるため、テーマの決定にあたっては先行研究をしっかりと咀嚼した上で何が書けるのかを考える必要がある。授業では、受講生の各自設定したテーマと研究計画に従って関連資料の調査方法・分析方法および研究方法についてその手順を説く。

つづいて受講生にそれぞれ自分の研究テーマに基づく研究経過報告をしてもらうとともに、当該分野の文献史料と学術論文を講読・分析し、討議を重ねる。授業中に随時、必要文献を指示する。

後期からは、特に修士論文の完成に向けた論文指導を集中的に進めていく。

● 学修到達目標

作成された論文が、先行研究を把握した上で、適切な分析を行い、妥当な結論に達し、且つ論理的な構成を具えたものにすることを目標とする。

● 演習計画

- 1) 論文テーマの決定Ⅰ・Ⅱ、2) 関連資料の調査方法Ⅰ・Ⅱ、3) 関連資料の分析方法Ⅰ・Ⅱ、4) 研究の手順Ⅰ・Ⅱ、5) 研究経過報告Ⅰ・Ⅱ、6) 文献史料講読Ⅰ・Ⅱ、7) 学術論文講読Ⅰ・Ⅱ、8) 論文指導①、9) 論文指導②、10) 論文指導③、11) 論文指導④、12) 論文指導⑤、

13)論文指導⑥、14)論文指導⑦、15)演習の総括

● 事前事後学習

「国際文化協力特別研究Ⅰ・Ⅱ」の参考文献に示した資料等を事前に自習し、毎回の講義で学習した要点を再度確認しておく必要がある。また各自、疑問点を整理して、次回の授業時に質問できるようにしておくことが求められる。

● テキスト

田中比呂志・飯島渉『中国近現代史研究のスタンダード』研文出版

● 参考資料

潘樹廣・松岡栄志『中国学レファレンス事典』凱風社

橋本萬太郎『民族の世界史5 漢民族と中国社会』山川出版社

溝口雄三『方法としての中国』東京大学出版会

溝口雄三『中国の衝撃』東京大学出版会

● 成績評価方法

演習時の発表・討議と、執筆論文の内容で評価する。

国際文化協力特別研究Ⅱ

佐竹 眞明

● 講義概要

この授業では研究の途についた諸君が修士論文を執筆するために身につけなければならない思考方法、倫理などについて、検討していく。独自の思考に基づき、独創性を持ち、説得力を持ち、論文を組み立てる必要がある。今年度は梅野潤子著『研究ってなんだろう—はじめて取り組むあなたのための論文作成ノート』(高管出版、2013)を用いながら、研究姿勢、思考方法、論文作成の方法を学習していく。また、受講生に研究計画を報告してもらい、研究方法上の助言を提供する。

● 学修到達目標

- ・受講生は自分の研究の意義、目的を説明することができる。
- ・受講生は研究方法の基礎を習得する。
- ・受講生は修士論文を執筆する基本的な方法を習得する。

● 事前事後学習

教科書『研究ってなんだろう』の「はじめに」を読んでおいてください。

● 講義計画

第1週 プロローグ 自己紹介 授業の進め方説明

第2週 テキスト第1章 研究について考えよう—準備編 1節 研究って何だろう

第3週 2節 研究の全体像をつかもう

第4週 3節 研究を始めるために準備しよう

第5週 第2章 研究を進めよう—実践編 1節 研究テーマを決める

- 第6週 2節 先行研究のレビュー
- 第7週 3節 研究計画を立てる
- 第8週 同
- 第9週 受講生による研究計画 発表
- 第10週 同
- 第11週 4節 調査の実施
- 第12週 5節 分析・考察
- 第13週 6節 論文としてまとめる
- 第14週 7節 実践につなげる
- 第15週 予備(授業内容に関するシェアリング)

● テキスト

梅野潤子著『研究ってなんだろうーはじめて取り組むあなたのための論文作成ノート』(高管出版、2013) 定価本体 1500 円＋税 丸善にて購入し、授業初回に持参すること。

● 参考書

小池和男『聞きとりの作法』東洋経済新報社、2000

甲斐田万智子・佐竹眞明・長津一史・幡谷則子編著『小さな民のグローバル学ー共生の思想と実践を求めて』上智大学出版、2016.

佐竹眞明編著『在日外国人と多文化共生ー地域コミュニティの視点から』、明石書店、2011

● 成績評価方法

授業への参加度を重視する。レポート。

国際文化協力特別研究Ⅱ(西洋思想・文化)

鈴木 啓司

● 講義概要(研究テーマ:フランス現代事情)

各自の研究テーマにそって修士論文を仕上げる。そのための指導を徹底して行う。

● 学修到達目標

説得力のある、それでいて独創的な学術論文を作成すること。

● 講義計画

前期

第1週 研究計画確認

第2週 発表と討論

第3週 指導

第4週 発表と討論

第5週 指導

第6週 発表と討論

第7週 指導
第8週 発表と討論
第9週 指導
第10週 発表と討論
第11週 指導
第12週 発表と討論
第13週 指導
第14週 発表と討論
第15週 発表と討論
第16週 総括

後期

第1週 研究計画確認
第2週 発表と討論
第3週 指導
第4週 発表と討論
第5週 指導
第6週 発表と討論
第7週 指導
第8週 発表と討論
第9週 指導
第10週 発表と討論
第11週 指導
第12週 発表と討論
第13週 指導
第14週 発表と討論
第15週 発表と討論
第16週 総括

● **事前事後学習**

日本語、フランス語両言語の表現力を磨くことに励んでほしい。

● **テキスト**

適宜手渡す。

● **成績評価方法**

受講態度と修士論文で総合的に判断する。

国際文化協力特別研究Ⅱ（国際開発協力・文化）

長田 こずえ

● 演習概要(研究テーマ:国際開発協力研究へのアプローチ)

本研究の前半は、国際協力(特に国際開発協力)を対象とする研究・調査方法論を説く。研究手法の導入として、問題点の気付き、研究テーマの設定、仮設の設定、調査、基本方法(特にデータ収集と分析方法)、文献の渉猟、資料の扱い方、研究の限界、まとめ方について講義する。後半は、個々の受講生の関心ある特定テーマや領域に沿って、関連する国際協力に関する調査報告書・書籍、マルチメディア、学術論文等を提示するとともに、演習形式で、学習グループで文献を選択し、査読する。受講生にそれぞれの課題について分担報告や発表をしてもらい、アカデミックな討議や、建設的かつ批判的なコメントを全員でシェアする。前期、後期を通して、当該領域の関連文献や基礎資料を紹介しながら研究指導を進めると同時に、ピアーとの経験共有と参加型の学習をも重視する。さらには演習の最終目的である修士論文作成に向けて、論文手法や執筆に関する具体的な指導を行い、必要ならばエクセルや SPSS などのツールの使い方も指導する。

● 学修到達目標

各自のテーマに基づく研究指導と演習を行うなかで、受講生が関連のある問題点に気付き、課題を設定し、先行研究をきちんと咀嚼し、自分の研究論文が書けるレベルまで高めることを目標とする。

● 演習計画

- 第1週 国際協力と国際開発協力に関する理解復習
- 第2週 研究テーマと仮説の設定
- 第3週 研究方法と手法
- 第4週 データ収集と分析の仕方 エクセルと SPSS
- 第5週 基本文献の査読の仕方
- 第6週 資料の扱い方と文献作成
- 第7週 参加型の調査方法の基礎理解
- 第8週 選択課題に関する文献講読①
- 第9週 選択課題に関する文献講読②
- 第10週 選択課題に関する文献講読③
- 第11週 選択課題に関する文献講読④
- 第12週 選択課題に関する文献講読⑤
- 第13週 選択課題に関する文献講読⑥
- 第14週 選択課題に関する文献講読⑦
- 第15週 演習の総括と論文執筆と作成

● 事前事後学習

参考文献に示した資料等を事前に自習し、毎回、主題について学習したことを復習し再確認しておくことが求められる。また、刻々と変化する国際情勢に精通するため、TV やネットを使い、国

際ニュースを見ることが望まれる。最低限の英語力、英検2級程度、を身につけることもプラスになる。常に自分の選択課題に関する知識を吸収する。外国語としての日本語能力も要求

● テキスト

「社会科学系大学院生のための研究の進め方:修士、博士論文を書く前に」、ダン・レメニイ他、同文館出版、2002年

● 参考資料

必要ならば、そのつど教室で指示する。

● 成績評価方法

出席率、授業時の発表・討議を参考にしながら、最終的な修士論文の質をベースに総合評価を下す。

国際文化協力特別研Ⅱ(国際政治・文化)

増田 あゆみ

● 演習概要(研究テーマ:国際政治学研究)

本研究は、国際政治学を主とし、国際社会における現象を政治学の視座で、分析し、考察することを主たる目的とする。

研究の前半では、修士論文の方針の確認と研究テーマの考察を議論をすることによって、検討を重ねていくことにつとめる。研究の後半においては、個々の受講生の研究テーマの再確認と完成に受けた研究報告を中心に、受講生間での議論を中心に、修士論文の完成へ向ける指導を行う。

● 学修到達目標

受講生の研究テーマに基づいた実証的な研究を積み上げることができるようになること。

● 演習計画

前期

- 1) 修士課程後期における方針について
- 2) 研究テーマの再検討
- 3) 報告と議論
- 4) 指導
- 5) 報告と議論
- 6) 指導
- 7) 報告と議論
- 8) 指導
- 9) 報告と議論
- 10) 指導
- 11) 報告と議論
- 12) 指導

13)研究テーマの考察

14)研究テーマの考察

15)総括

後期

1)研究テーマの考察

2)報告と議論

3)指導

4)研究テーマの考察

5)報告と議論

6)指導

7)研究テーマの完成

8)報告と議論

9)指導

10)研究テーマの完成

11)報告と議論

12)指導

13)研究テーマの再検討

14)指導

15)総括

● 事前事後学習

事前においては、毎回の講義時に報告する文書の予習、事後においては、講義の復習を行うこと。

● テキスト

『国際関係論入門：思考の作法』初瀬隆平編著、法律文化社 2012 年

● 参考資料

適宜、指示する。

● 成績評価方法

受講態度および修士論文において総合的に評価する。

国際文化協力特別研究Ⅱ(ドイツ文学・文化)

山本 淑雄

● 講義概要:ドイツ文学研究

「国際文化協力特別研究Ⅰ」に引き続き、修士論文作成を指導していく。先行研究を踏まえながら、独自の観点が確立できているかを確認し、論文完成をめざす。講義の後半ではノヴァーリスの《Heinrich von Ofterdingen》(邦訳名『青い花』)を精読し、特に作中のメルヘンの意義に注目し、

ゲーテや他のロマン派のメルヘン、さらにグリム童話を考察することによって、ドイツ・ロマン主義文学の理解を深める。

● **学習到達目標**

ドイツ文学の理解を深め、独自の視点から修士論文を完成する。

● **講義計画**

- 1)メルヘンの象徴 2)終末論と黙示的世界 3)ユートピアと千年王国
- 4)ゲーテのメルヘン 5)ドイツ・ロマン派のメルヘン 6)グリム童話の世界
- 7)グリム童話の代表作 8)メルヘンにおける異界 9)ロマン主義と歴史の関連
- 10)自然との一体 11)無限への憧憬 12)修士論文発表① 13)修士論文発表②
- 14)修士論文発表③ 15)総括

● **事前事後学習**

事前にテキストを熟読しておくこと。

● **テキスト**

Novalis: Heinrich von Ofterdingen (Reclam)

● **参考資料**

授業時に紹介する。

● **成績評価方法**

授業時の発表、修士論文の内容を基に評価する。